

見つけた「もの」を交流して視点を変えることで、働く「人」への興味を膨らませる学習

～2年「まちが大すき たんけんたい」の実践を通して～

林 裕 輔

I はじめに

全体研究の2年次のテーマ「深い学びを実現する学習づくり」を受け、生活科の2年次研究では、成長の実感を促す学習づくりについて研究を進めた。次期学習指導要領では、「活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。」「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」ことが重視されている。このことから、活動や体験の過程において、対象と関わりをもち、自分自身や自分の生活について考え、表現し自分の成長に気付くことができるようにすることが生活科で求められていると言える。

生活科においては、学習のまとまりとしての単元の中で、体験活動と表現活動を繰り返しながら児童の気付きの質を高めていく。しかし、体験活動で気付いたことについて、一人一人が表現する場を設定しても、気付きがうまく共有されず、新たな気付きが生まれたり、気付きが関連付けられなかったりしないこともある。また、自らの学びを振り返り、自分のよさや可能性などの自分自身の成長を実感する振り返りとなっておらず、次の活動につながらないこともある。

したがって、体験活動と表現活動とが子供の文脈に沿って繰り返される単元を構想することや、成長を実感するための振り返りを充実させる必要があると考える。

そこで、生活科2年次研究のテーマを『学びのサイクル』を活性化させることで、成長の実感を促す学習づくり」と設定した。「学びのサイクル」を活性化とは、学習過程が行きつ戻りつしながら何度も繰り返すことである。振り返りを充実させることで、「学びのサイクル」は活性化し、自らの成長を実感することができると考えました。



働く「人」について表現する児童の姿

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童の成長の実感を促す学習を実現するための手立てについて明らかにすることである。そのために、以下の2つの視点から、授業実践「まちが大すき たんけんたい」における児童の様子について分析する。

- ① 試行錯誤や繰り返す活動の充実
- ② 成長を実感する振り返りの充実

なお、研究の対象とした単元の概要は以下のとおりである。

1 単元名 「まちが大すき たんけんたい」

2 単元の目標

地域を探検し、マップを作ったり、地域の人々にインタビューをしたりする活動を通して、自分の生活が地域の様々な人々や場所と関わっていることや地域の人と関わることの楽しさが分かり、親しみや愛着をもって適切に接したり安全に生活したりできるようにする。

3 単元の概要

本単元は、学習指導要領内容(3)「地域と生活」、(8)「生活や出来事の伝え合い」及び内容構成の具体的な視点「イ 身近な人々との接し方」「ウ 地域への愛着」「カ 情報と交流」を基に構成されている。

学校のある地域に親しみを感じるためには、地域に関わる活動を通して、自分たちの生活が様々な人々と関わっていることを知る必要がある。

そこで、本単元では、学校のある地域にどのような場所があり、どのような人が働いたり生活したりしているのかを調べていく中で、自分たちの生活が地域の人々の思いや営みに支えられていることに気付くようにした。単元の学習を進めるに当たっては、児童の思いや願いに沿いながら、繰り返しまちを探検し、人との触れ合いを重ねることで、地域で働いたり生活したりする人々に、愛着をもって接していくことを目指した。

Ⅲ 結果と考察

1 試行錯誤や繰り返す活動の充実

(1) 結果

本時の学習の前に児童は、グループ探検に行っている。写真館に行ったグループの振り返りを見ると、照明設備や背景を変えられる機械など、今までに見たことのないものを見たことや、カメラと人間の目の仕組みの共通性を教えてもらったことなど自分が知らないことに気付いている様子がうかがえられた。

本時の導入では、このようなグループ探検での気づきを全体交流した。その後、探検直後の振り返りにおいて「人」の視点で気づきを記述した児童を取り上げ、「お客さんのためになっていることについて考えてみた人がいたよだけね。同じようなことに気付いた人はいますか。」と教師が問い掛け「人」の視点で見直すよう促した。それにより、自分たちが撮ってきた写真を見直し、まちの「すてき」を見付けることの必要性を児童が認識し、学級全体で追究する問題となった。

まず、自分たちが撮ってきた写真を見直して「お客さん」のための「もの」や、している「こと」について、付箋紙に書いてグループ内で交流することにした。

写真館に行ったグループの付箋紙には、「きれいに撮ったり、人の好みに合わせたりするために、明るくしたり暗くしたりする。」「きれいに撮るようなライトがある。」「お客さんのために髪を整えるものが置いてある。」「携帯電話からも写真を見ることができるようサービスがある。」などが書かれていた。

(2) 考察

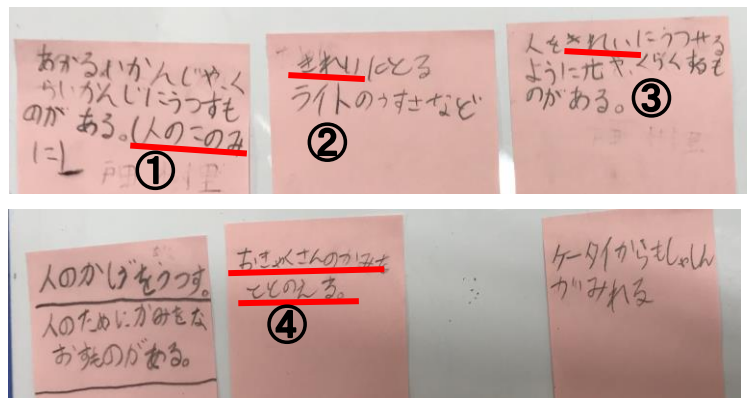
児童が書いた付箋紙を見ると、ライトが「人のこのみ」に合わせるための工夫の1つであるということに気付いたことが分かる(資料1の傍線部①)。また傍線部②③のようにライトが、「きれい」に写すためのものであるということにも気付いている。カメラの近くにあったヘアブラシが傍線部④にあるように「お客さんの髪を整える。」ためにあることも気付くことができた。付箋紙が貼られた後に、共通点があるかどうかをグループに問い掛けると「お客さんをきれいに写すため。」と答えていた。教師が話題を整理することで、共通点を見付けることにつながった。

「明るさを調整する機械」、「光を当てるライト」、「ヘアブラシ」などの、体験して気付いた個別の気づきを付箋紙で見比べることで、「お客さんのためにきれいに写すため」という気づきと結びつき、写真館の人の仕事や工夫について自分たちなりの考えをもつことができた。

その後の、グループ探検では、「お客さんをきれいに写すために他にも気を付けていることはありますか。」と質問する児童や、もう一度カメラやライトを見直し、自分が確かめたかったことをノートに書く児童の様子からも、一回目のグループ探検の交流により新たな学習問題が生まれ、実際にもう一度写真館に行って確かめようという次の自発的な行動を誘発することにつながっていたことが判断できる。



写真1 「すてき」を見直し、語り合う児童の姿



資料1 写真館に行ったグループの付箋紙交流

2 成長を実感する振り返りの充実

(1) 結果

本時の学習前のグループ探検において、セブンイレブンに行った児童Aは、品揃えの多さに驚いていた。探検に行った時間に商品の入れ替えをしており、毎日商品の入れ替えをしていることや、1か月ごとに多くの商品が入れ替わることを聞いて、陳列されている商品に興味を膨らませていた。

本時で児童Aは、「セブンイレブンでは、毎日多くの商品を入れ替えている」ことや、「商品を入れ替える時に一つ一つ店員さんがチェックしている」ことなど、見たり聞いたりしてきたことをグループ交流で話していた。本時のまとめでは、「いろいろなお店があったけど一つ一つ意味が違う。」「お店は違うけどそれぞれが人のためのお店だって分かった。」「全部人に優しいね。」「人のためにあるんだね。」などの発言があった。また、児童Bは、「仲間のおかげでお客さんのためにしていることが分かってよかった。」と、学び方のよさについて発表していた。それを聞いた他の児童は、「なるほど。」「確かに。」など納得した様子であり、学習に対する達成感を感じていた。

その後、本時の振り返りをする時間を設けた。児童Aの振り返り（資料2）を見ると、傍線部⑤「商品を変えていることにびっくりした」というグループ探検直後の振り返りの記述から、傍線部⑥「お客さんが困らないように」という記述に変化した。「商品の品揃え」と「お客さんのためにしていること」との関係に着目できた様子が見える。また、児童Bの振り返り（資料3）を見ると、傍線部⑦「仲間たちがいて分かってよかった。」と、友達との学びのよさに気付いている姿が見られた。

(2) 考察

本単元では、探検直後と探検での気づきの交流後に振り返りをし、自分の考えの変容や学び方のよさに気付くことができるように工夫した。カードの記述（資料2）を見ると、探検直後は商品の入れ替えという「もの」に着目していたが、「人」の視点で改めて探検の内容を見直し、交流したことで、商品を入れ替えることが客のためになっていることに気付いている。商品と客が結び付き気付きの質が高まったことが分かる。このような客の視点から振り返りをした児童は26人（74%）であった。

児童の思考や学びの様子に沿って、振り返りの場面を設定したことは、児童が自分の変容や学びのよさ実感することにつながった。

一方で、振り返りカードを書くことに消極的な児童もいた。何を書いてよいのか分からなかったり、この振り返りが次の探検にどう結び付くのかイメージがもてなかったりする為であったと考える。児童が目的意識をもち、意欲的に取り組むことができるような振り返りの在り方について検討

6月8日 6月15日

セブンイレブンはほとんど品揃えが豊富でびっくりしました。

お客さんが困らないように品揃えが豊富でびっくりしました。

資料2 児童Aの振り返り



写真2 学びの方のよさを発言する児童の姿

6月8日 6月15日

お客さんが困らないように品揃えが豊富でびっくりしました。

仲間たちがいて分かってよかった。

資料3 児童Bの振り返り

する必要がある。

IV まとめ

本研究では、学習過程と振り返りの充実に焦点を当て、児童の成長の実感を促すための効果的な手立てについて明らかにしようとした。そのために、「試行錯誤や繰り返す活動の充実」「成長を実感する振り返りの充実」の2点について、「まちが大すき たんけんたい」の実践を基に論を展開した。以下に成果と課題を示す。

1 成果

- 付箋紙を用いて、互いの気付きを比べることで、個別の知識が関連付けられ、児童の気付きの質が高まった。
- 教師が共通点や類似点に気付かせたり、ストーリーをつなぐ言葉掛けをしたりすることで、児童のイメージをより広げることができ、次の学習問題の設定につなげることができた。
- 児童の活動を踏まえて、適切に振り返りの場面を設定することで、活動中は気付かなかった視点や学びのよさ、自己の変容などに気付き、成長を実感することにつながった。

2 課題

- 「もの」、「こと」、「人」を関連付けて考えるなどの論理的に考える力を生かし、自分たちの生活圏の様々な人や場所との関わりを考え、生活を豊かにしていく態度を更に養っていく必要がある。
- 本単元の学習で、児童は自分たちが「探検隊」という意識で活動をしているため、例えば、「探検ガイドブック作り」などの振り返りの方が楽しく取り組むことができたのかもしれない。振り返りカードの書かせ方は学びの文脈に沿っていたのかについては検討していく必要がある。学習活動に即した振り返りの仕方を考えていく。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 小学校学習指導要領解説 生活編 文部科学省 東洋館出版 平成29年7月
- 初等教育資料 No. 954 「学習指導要領改訂のポイント 生活科」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年6月
- 初等教育資料 No. 960 「生活科における主体的・対話的・深い学びの実現に向けた授業改善」
文部科学省 東洋館出版社 平成29年10月
- 新教科誕生の軌跡 吉富 芳正 田村 学著 東洋館出版社 平成26年6月
- 生活・総合「深い学び」のカリキュラムデザイン
田村 学編著 横浜市黒船の会著 東洋館出版社 平成29年8月
- 平成29年版 小学校新学習指導要領ポイント総整理 生活
久野 弘幸編著 東洋館出版社 平成29年8月
- 新学習指導要領の展開 生活編 田村 学編著 明治図書 平成29年10月
- 平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 生活 朝倉 淳編著 ぎょうせい 平成30年1月

生活科部会

司会者 小林 豊（旭川市立永山西小学校教諭）
助言者 高橋 一寛（旭川市立向陵小学校長）
小野 敦司（旭川市立千代田小学校長）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

試行錯誤や繰り返す活動の充実

- 「お客さんのため」という視点にした意図は？
→探検直後の振り返りからも、お客さんのためという視点に気付いている子が数人いたので、本時でその気付きを広げることが大切であると考えた。また、視点を1つに絞ることで、子供たちが考える際に混乱しないようにした。結果的に、「お客さんのためでもあるし、お店の人のためにもなっている。」など、視点が広がっている子もいた。探検を繰り返すことで、様々な立場、視点に気付くようにしたい。
- 「すてき」を見直す際の視点を明確化するといい。
- グループ内の付箋紙交流の中で、子供から出た「すてき」を教師が換言し、子供に返していたのがよかった。
- 付箋を「似ている」「違う」などに分類するなどの交流があれば、更に児童の思考が整理されたのではないか。
- 前時の児童の振り返りから「もの」から「人」へ視点を変えたのはよかった。人の視点に着目している写真の提示をしていた手立て、教師の対話がよかった。しかし、ねらいとのずれがあったのではないか。



成長を実感する振り返りについて

- ストーリー性を生かした振り返りがよかった。
- 振り返りの記述が他のグループのこともよかったのか。他のお店に行きたいという思いになるのではないか。
→地域の様々な人や仕事に気付くことがねらいであるので、他のグループのことを振り返りとして書くのはむしろ本時の振り返りとしては望ましいと考えていた。他のお店の人にも会いたいという思いをもつ児童もいるのは想定していた。次時の計画を立てる時に、本時で気付いたお客さんのための「すてき」を再度見に行ったり、実際にお店の人の仕事を体験したりすることで確認しなくていいのかを問う。もう一度、同じお店に行って調べてきたいと思う。
- 友達との学びのよさを実感し、「友達のおかげで～」、「仲間がいてよかった」と表現している児童がいた。素晴らしい振り返りだった。

授業の構成について

- 全体交流で自分が見付けた「すてき」をもっと出して、徐々に「人」の視点に気付いてくるような構成も考えられたのではないか。
→そのような流れも想定しており、授業の構想の本時の展開ではそのような流れになっている。しかし、児童の中で人の視点で「すてき」を見付けている児童も想定よりも多く、そのような児童の気付きを共有し、「人」の視点で写真を見直す学習活動を充実させることが気付きの質を高めることにつながると考えたため、本時の流れにした。

II 助言者からの講評

(1) 小野 敦司 校長から

授業が成立する基盤として大切なのが学級づくりである。授業前の様子や付箋の交流の様子からも学級づくりが素晴らしいのがよくわかった。本日の授業は、生活科というよりは、むしろ総合に近い。授業の中でも、子供たちは知識と知識を関連付け、「もの」から「人（お客さんのため）」へ視点が変わり、関連付けられた気付きがあり、まさに「深い学び」が実現されていた。深い学びが実現されているかは、子供の姿で語っていくほかはないが、グループ内の話し合いの内容からも、深い学びが実現されていたと言える。2年生にとっては、レベルの高い学習であったかもしれないが、今までの学習の積み重ねがあるからこそ成立するのであると感じる。



附属小学校の特殊事情として、学校のある地域と住む地域が違うということもあるが、この学びが自分の地域にも役立っていくように感じた。この学習を生かして、夏休みの宿題などで、自分の地域の店や施設の人と関わる活動などがあればなおよい。ただし、体験が深まっていくと自然と「人」の視点が出てきたのではないかと考える。例えば、次の探検ではセブンイレブンでモップ掛けを体験させてもらう。すると、掛け方の違いに気付く。お客さんへの配慮がモップ掛け一つから分かる。また、商品を袋に入れて渡す時も、手を添えて渡すなど、商品の渡し方にもお客さんへの配慮がある。子供たちは、実際に体験することで気付いていく。

蛇足ではあるが、「町の研究」という本がある。「考現学」という学問のものである。「考古学」の逆である。その中には、売り声や笑顔、あいさつなど「こと」についてのことも書かれている。探検が進み、そのような「こと」へも気付いていくと、将来その職業に就きたいとか、こんな人になりたいなど、まちや人への愛着が更に深まる学習になっていくと思う。

(2) 高橋 一寛 校長から

生活科の改訂のポイントは3点ある。①育成する資質・能力の具体化や内容項目の整理。②学びを振り返り、気付きの質を高める。③幼児期の学びからの接続である。

まず、1つ目は、「何を学ぶか」ということであり、カリキュラムマネジメントの視点である。単元構成を見ても、内容(3)、(8)と、具体的な視点のイ、ウ、カが構造化されているのが分かった。ただし、15の学習対象との関係性がうまく構造化できていたのか。内容、視点、学習対象と育成する資質・能力の関連性を更に意識した単元づくりが求められる。



次に2つ目は、「どのように学ぶか」である。本日の授業でいうと体験と表現が行き来したのかということである。お互いの気付きをグループで交流したあとに、授業者が「どれがいいか決めよう」というものがあつた。決める観点は子供たちの中にあつたのか。「友達と似ているところや違うところはどこかな？」など、類型化のような思考を整理するような発問や、実際に付箋を動かすなどの活動があると更によかつたのではないだろうか。

そして、最後は「何ができるようになるか」、学習評価や振り返りについてである。大事なことはもちろん、向かうべき方向をしっかりと授業者が押さえることである。授業者は、最後に「今日の授業はどんなことが分かりましたか。」という、ごくごく一般的な発問をし、「振り返りカードに書きましょう。」と指示し書かせていた。果たして、その発問・指示でよかつたのか。附属小学校の使命は、モデル校として発信していくことである。見に来た参観者が、お土産になるようなものがある実践を積み重ね、今後もモデルとして頑張っていってほしい。